

紐の結び目

志村 良知

十年ほど前の父の曰。五月生まれの家内の父に三人姉妹が花の咲いている鉢植えのクレマチス（てっせん）を贈った。

紫の大輪で、凜とした形の花はたいへん気に入り、花が終わった後、自分のベッドから朝一番に見える場所に地植えした。父はどんなことでも、はまると常人ではとても及ばない根気とアイディアと手腕を発揮する人で、このクレマチスも当たりだった。

鉢植えの植物を地植えすると、たちまち大きくなる。支柱を立て、棚を作って這わせ、観察し研究し、見るものを驚かす見事な大株に育てていった。

令和に入ると、花の数は二百を越えた。クレマチスは朝顔のように順繰りに咲くのではなく、比較的短い花期に塊まって咲くので、満開時は見事であった。

花期には逐次電話で報告があり、ご無沙汰の年には近所に住む姉や妹から写真や動画が届いた。動画の中で父は「俺を撮らないでいい、花を撮れ」と手を振り、それを妹が「はい、照れていません」と実況していた。

今年の二月初め、心臓の不調を訴えて入院。九十六歳という高齢もあり、治療の甲斐なく三月七日、娘三人に看取られて逝った。

その日は快晴。九十九里海岸沿いの土地は真平ら、十代の終わりに生涯で唯一故郷から離れて暮らしたという満州を思わせるように、赤い夕日が残るうちに東には満月が上がった。

葬式は時節柄で家族葬だったが、曾孫も含めて参列しうる限りの親族が集まった。

そこからは、家の中の遺品の整理に追われる日々。物を捨てない人で何でも残してある上、さりげないところにお宝があったりするので油断できない。時間と労力がかかる。

四月末、四十九日の法要で再び皆が集まった。冬景色だった庭は初夏の様相、クレマチスが咲き始めていた。その蔓は昔風の凝り性の人の手で、どう這わせるかの熟慮のもとに、同じ長さに切った麻紐で正確に全く同じ形で固定してあった。父の姿が見えるような仕事の跡であった。

父の手の紐の結び目クレマチス 良知